

ティムールの冬営地と帝国統治・首都圏

川口 琢司

本稿では、ティムール(1336?~1405)の冬営地と国制との関わりを考察する。

彼の行動に注目すると、季節移動を行っていない点、宮殿や固定家屋で越冬している点、冬営地の場所や選定理由などから、遊牧民の視点からだけでその行動を理解するのは困難である。

政権樹立以前、ティムールは故郷のケシュやチャガタイ家と関係の深いカルシを主な冬営地とし、カシュカ河流域に勢力圏を築いた。しかし、政権樹立とともにサマルカンドを都に定め、内政に専念するため、夏営に適したサマルカンドをあえて主な冬営地とした。1370年代半ば以降、彼はカルシ郊外の「鎖の宮殿」をしばしば冬営地とするようになった。これは実権をもった最後のチャガタイ・ウルス君主に代わって権力を行使するためであった。また、西アジア進出を始める1380年前後から、サマルカンドーカルシ間に位置するケシュが都として整備され、サマルカンドとの両京制が出現した。

1387~88年、トクタミシュ軍がマー・ワラー・アンナフルに侵攻し「鎖の宮殿」を破壊したため、ティムールは重要な冬営地を失った。その後、西アジアやキプチャク草原への遠征を繰り返す中で、西北イランのカラバール地方が冬営地として重視されるようになった。ティムールはバイラカーンの再建や運河の建設を進めたが、これはカラバールを帝国の西方統治の拠点とするためである。その西北イランと中央アジアは幹線道と駅伝で緊密に結びつけられていた。

晩年、ティムールはサマルカンド郊外のバールグで生活することが多くなり、バールグ内の宮殿で越冬した。バールグは彼の権力を誇示する施設であり、後宮の役割をも果たしていた。サマルカンドーケシュ間の幹線道沿いには、小市ミスルが建設されるとともに、利用者の便宜のために宮殿付きバールグ、牧地、宿泊施設、駅亭などが用意された。その結果、幹線道とその周辺は帝国の「首都圏」の様相を帯びるに至った。